

菩薩の生活における理念と実際

----法華経を中心に----

この発表は、共同研究テーマ「仏教における社会的実践」のもと、与えられたサブテーマ「菩薩の生活における理念と実際」について考察しようとするものである。はじめに、今年度のテーマである社会的実践とは宗教的实践としての行ではない旨が確認されているが、仏教における実践の理念は宗教的なものとならざるをえないことに留意しておきたい。

さて仏教の修行はその出発点において自らの内面の省察と自我の克服をめざすものであり、社会生活に背を向けたものであった。大乘仏教になると菩薩という概念が変化していくことによって他者の存在が自らの宗教的实践に関わるようになり、その実践が個人の内部で完結するものでなくなるという意味で社会性をもつようになる。

菩薩に関しては、ある人が菩薩となることの条件として発心・誓願・授記をあげることができるだろうが、ここではそのうち授記をとりあげる。大乘經典において広く見られるこの授記は、二乗に成仏させる手続きとして機能し、主要な関心はその手続きや時・仏名・国土・眷属などに置かれてきたが、いくつかの經典ではその国土の様子についても描写されており、菩薩の実践を考えるうえで参考になることがらが含まれている。ここでは大乘經典の中で最も整った形の授記がみられる法華経に注目する。この經典では、成仏の根拠として示された授記はその本来の役割を発展させており、そこで描かれる国土の様子描写のなかに菩薩の実践目標を示唆することについて考察し、ついで法華経における菩薩の実践そのものの意味を検討する。また初期の大乘においては重視されていた社会生活や社会的実践は、時代がすすむにしたがって経論のテーマでなくなっていくことについて、初期～中期の大乘仏教の実践を扱う論書などから考察を加えたい。